
エンジェル・フィールド

広河陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンジェル・フィールド

【Nコード】

N0335X

【作者名】

広河陽

【あらすじ】

遠い所に旅立つ異性の友人に、最後に贈る言葉は「」。

恋愛に限りなく近い、男女の絆を描いた切ない物語。

舞台は近未来の宇宙コロニー、SFの設定を散りばめています。

自身のサイト「ふみかばんのほーむ」より転載したものです。

episode 1

情報端末のキーを叩いていたハルジは、モニター右上の時刻表示に目をやると、TVフォンの通話ユニットを手元に引き寄せた。それをきっかけにモニターから視線を外し、軽く右肩を回す。

やりかけの仕事は目処がついた。話を早めに切り上げれば、睡眠時間も朝食も削らなくて済むだろう。

左肩もマッサージしようとする、TVフォンの呼び出し音が鳴った。

ハルジは間髪入れずに通話ユニットを取り上げた。

通常、フォンに切り替わって相手を映し出すはずのモニターには変化が起こらない。迷惑フォンの可能性をちらりと思いつかべながら、ハルジはユニットに慎重に呼びかけた。

「……もしもし」

「あ、ハル？ ごめん、こんな夜遅くに。時間の割にはフォンに出るの、早いね。仕事でもしてた？」

「……まあね」

聞き覚えのある声に安堵する反面、その声が予定より高めの声だったので、ハルジは軽い失望を隠してそう応えるのがやっとだった。彼女がハルジにフォンをかけてくる時は、厄介事を抱えている時としても過言ではない。厄介事の込み入り具合に比例して、通話ユニットを持っている時間も長くなる。その面倒が嫌ではなかったが、他にフォンを待っている時ぐらいいは避けたい相手だった。

とは言え、相手は若くて美しい女性だしその上、自分にとってかけがえのない人でもある。嬉しさが湧いてこない筈はない。

一面に無機質な文字の連なりを映すモニターに、ハルジは彼女の華やいだ笑顔を思いの中で投影する。挨拶の言葉が口をついて出た。「サンドラは元気？ 研究所勤務って結構ハードだって、聞いたけど」

聞きたい事はあったが、一ヶ月ぶりのフォンだったのでハルジはまず近況を訊ねる。サンドラは、先程のハルジを真似して答えを返してきた。

「まあね。でもほら、自分で選んだ道だし。後悔はしてないよー」

サンドラが語尾を伸ばすのは、甘えではなく機嫌が良い証拠だ。

「よかった、よかった」

「ハルは？ カレリアさんとはうまくいってる？」

カレリアとは、ハルジがフォンを待っている相手の名である。

「それなりに。サンドラは？」

ハルジはさりげなく訊いたつもりだったが、何処かに緊張した響きがあったのだろう。それを耳聴く感じ取ったサンドラは、意味深ながらも明るい含み笑いをして続ける。

「私の事なんか心配しないでよ。磯崎さんはあの通り、素敵な人ですから」

「……はいはい」

昔はこんなちょっとしたおのろけもうらやましくて少し辛かったが、今は苦笑と共に受け流せる余裕があった。

しばらくは当たり障りのない世間話が続くだろう。が、今までの経験からハルジは知っていた。サンドラがこんな映像オフのフォンをしてくる時には、特に重い悩みがある。きっと、悩んで泣き腫らしたか何かした後で、努めて明るい声で話しているのだ。

世間話が途切れ、通話ユニットの向こうでサンドラが息を飲むのがハルジに感じられた。次の瞬間、彼女は絞り出すような声で苦しそうに言った。

「あたし、磯崎さんとは一緒になれない……」

ひらかた

枚方ハルジとサンドラ・フィオルが研究生として分子遺伝学ラボに配属になったのは、4年前の秋だった。

ハルジはごく普通にスクールで学んだので20歳だったが、サンドラは飛び級制をフル活用していたので15歳だった。

そんな努力家が（天才、ではない。もし天才ならば論文によって、6歳以上であればラボ入りできる特別処置が適応される）分子遺伝学ラボに配属されるのは5年ぶりだったので、サンドラはちょっとした有名人になっていた。

それも女性（というよりは少女だった）ということで、ラボの研究生や研究員はこぞって事前にデータを取り寄せており、サンドラの顔は知られていた。

そんな理由から、サンドラはラボ配属の顔合わせの時から15歳の少女として周りから扱われたのである。が、それは彼女が望ましいことだった。彼女を同列の大人として扱ったのはハルジだけでサンドラはそこに、いたく感銘を受けた。

しかしながら、それはハルジがサンドラの真意を読み取っていたからではない。ハルジはあまり他人に興味を持たない質で、下調べを怠ったのである。

サンドラは上背があり、まどっている雰囲気が大人数だったので、下調べなどしなければ20歳の女性として充分通じる。普通ならば大変な失礼に当たっただろうことがこの場合は功を奏したのだ。

ハルジがサンドラの年齢を知ったのは、出会ってから一週間ほど後だった。最初はハルジも接し方を変えようかと考えたが、今さら態度を変えるのに不誠実さを覚えたのと、何よりもサンドラがそれを望んでいなかったので実行しなかった。

そして、その事情をサンドラに話しても彼女の感銘は色褪せなかったのである。

ハルジは、サンドラ・フィオルをサンドラと呼んだ。同姓が多いなど仕方ない状況以外では、ごく親しい人しかファースト・ネームを口にしない傾向が強い東洋人^{エイジャン}のハルジにとって、これは珍しいことだった。

しかし、サンドラの愛称の“サンディ”は口にしなかった。

愛称を呼ぶのは本来は親しみを表す方法であるが、サンドラにとっては彼女のプライドを傷つけることだと、ハルジは直感したのだ。

サンドラは太洋州人オセアニアの常として彼の姓でなく名を呼び、友人として愛称の“ハル”を呼ぶ。

が、サンドラが愛称を呼ぶのはこのラボではハルジしかいなかった。

わざわざ東洋人、太洋州人という単語を持ち出したのには訳がある。最近ではだいたい混じり合ってきたが、ここの文化はこの二つに大別されるからだ。

極東の島国、日本に端を発する東洋人。

太平洋の南半球に浮かぶ大陸オーストラリアを起源とする太洋州人。

およそ東洋人6に対し太洋州人1の割合で人々が暮らすここは、月と地球の間にある重力均衡宙域に浮かぶ5つの衛星都市の一つ、グラウクス。

30年前、日本とオーストラリアを同時に襲った「隕石の災厄」、隕石が撒き散らしたウイルス、メテオリック・カラミティ（≡MC）は多くの人命を奪った。だが、致死率98%のMCの洗礼を免れることができた人々が約400万人いた。彼らはMCをそれ以上広げないようするため、衛星都市という名の牢獄に入る運命を自ら受け入れた。その彼らがハルジやサンドラたちの親以上の世代に当たる。

第2世代が台頭し始め二つの民族は融合してきたが、この区別はまだ無意味ではない。

episode 1 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月16日です。

episode 2

ハルジが、映像を切った音声限定のTVフォンをサンドラから受けたのは、4年来の付き合いの中で今回が3度目である。

1度目は初対面から1年が経とうとする夏のこと。

蒸し暑い夜だった。

衛星都市の気候は気象局によって制御されているが、地球環境とあまりずらさないようにするため、時に不快と感じる環境ですら故意に再現する。

学生専用の住居複合体コンプの一室で、ハルジが怠惰な空調設備に代って夜風を入れようと窓を開け放っていると、フォンが鳴った。

通話ユニットを取るとサンドラだった。

その頃には二人は互いにフォンのやり取りをしていたので、別に珍しくはなかった。真夜中という時間も不思議ではなかった。実験を終えて部屋へ戻るとそのぐらいの時間になることは、よくあった。音声限定だという以外は、普段と変わらないフォンだった。

サンドラの最初の一声は、いつものように共同実験者パートナーと上手いっていかないという悩みの告白から始まった。

彼女のパートナーは閉鎖的思想を持つ東洋人エイジャンだった。彼は、衛星都市で少数である太平洋州人オセアニアに一般に根拠のない差別意識を持っており、太平洋人を酷く軽蔑していたのである。

特にサンドラに対しては彼女の才能への嫉妬もあり、傍目からも辛く当たっているように見えた。が、サンドラが気にかけていないかのように明るく振る舞っていたので、ラボの人間のほとんどはその深刻さに気づいていなかった。

周りに気づかせないぐらいにサンドラの演技は良く出来ていたとも言えるし、ラボ入りを選ぶほど一つの才能が突出している人間は他人の感情に鈍いのだとも言えた。

だが、気づいてはいるのだが、自分が手を貸すことでもないと思

えないふりを決めこんでいる者が一番多いのではないかとハルジは思っていた。

決して責められることではない。誰彼ともなく救いの手をさしのべることはないのだ。

が、それにしても無関心すぎる。

ハルジも、それほど人に偉そうには言えない。サンドラからちよくちよく相談を受けていたので深刻さを知っていただけなのだから。相談されてほおっておけるほど無神経ではなかったが、ハルジの性格ではこうやってサンドラの愚痴を聞いて自分が思っていることを彼女に伝え、彼女が最悪の選択をしないように力づけてやるぐらいしか出来ないのだ。

サンドラが自分を相談相手に選んだ以上、彼女が最も望んでいるのはそういうことだと思うようにしていた。そうでなければ救いがない。

前向きに愚痴めいたことをひとしきり語った後、サンドラはお決まりの台詞を吐いた。

「あたしは自分が太平洋州人だってことに誇りを持つてゐるから。こんな不当な差別には決して屈しない。戦い抜いてみせるわ」

喋り続けた後なので、一人称が崩れて「私」から「あたし」になっていた。こういうところにムキになるのが年齢相応で、何処となくサンドラを微笑ましく思ってしまうのが常のハルジだったのだが、その日は違っていた。

言い方に奇妙な真剣さと自分に言い聞かせるような痛々しい調子が含まれていたので、ハルジは不安になってしまったのである。

通話ユニットを片手に持ったまま窓辺に歩いて行き、開けていた窓を閉めるとハルジは思い切って聞いてみた。

「サンドラが、自分が太平洋州人だということに誇りを持つのは良いと思う。俺には誇りを持つることなんか一つもないから、うらやましいくらいだよ。だけど、それとこれとは話が違わないかな」

「どういうこと？」

フォンの向こうから噛みつくようにサンドラは言った。

ハルジは努めて落ち着いた口調で続ける。

「俺たち研究生の役目は、研究員から与えられた実験を確かかつ速やかにこなすこと。そのためにはパートナーとの人間関係を円滑にすること。こういうことを言うとき悲しくなるけど、人間っていうのは相性があって、上手くいかない人とはどうやっても上手くいかない。そういう時は、お互いの関係を事務的なものに留めて立ち入らないようにする。それが世の中を渡っていく方法の一つじゃないかな」

「あたし、彼に立ち入ってなんかいない」

「いいや、立ち入っているよ。彼の太洋州人に対する感情を改めようとしている」

「……うん、まあ。でも……」

静かに、だが断固としてハルジはサンドラの言葉を遮る。

「でも、と君は言うけれど、彼だって根拠なしに太洋州人に悪い印象を持った訳じゃないと思う。理由があるんだよ、きっと。それに今までそうして生きてきたんだ。そう簡単に態度を改めるなんてできやしない。できるなら、もう、そうしているはずだよ」

実際、ハルジはサンドラのパートナーからそんな話を聞いていた。言ってしまうと、父親の後妻である太洋州人の義母から幼少時に酷い虐待を受けたということだが、一言で片づけられるほど彼の心の傷は浅くはないようだった。

「サンドラだって、人にどうしても譲れないものはあるだろう？」

「だけど、それはあたしが負けを認めたってことじゃない？」

「勝ちとか負けとかの単純な問題じゃないよ。上手く言えないけど視野が狭いんじゃないかな。サンドラはもっと聡いはずなんだから、自分でよく考えることをすすめる」

サンドラの優越感をくすぐって頭を冷やそうとしたのではない。ハルジは本気でサンドラの才能を認めていたので、こういうことが当然のように言えるのだ。

もし小細工をしたのなら、サンドラはすぐ見破って機嫌を損ねてしまう。

ハルジの飾らないやり取りは、サンドラの高ぶった気持ちを鎮めることができた。

「つまり、彼の太洋州人のイメージに口出しするなってこと？」

「もう少し穏やかな方法があるはずだよ。色々やってみて駄目だったら パートナー解消願いを室長に出せばいい。でも、それをする前に自分にできることはやった方がよい」

「うん、判った……と思う」

先程より幾分か明るい声が返ってきたので、ハルジはほっとした。「それにしても……」

と言いかけて、ハルジは慌てて口をつぐむ。

「何？」

「いや、いいよ」

ハルジは自分が言いかけたところだが、サンドラにひどく立ち入ることだと気づいた。

いくら親しい間柄とは言え、ハルジには失礼に思えたので言葉を飲み込んだのだ。が、サンドラはハルジの言葉の端から彼が口にしたかったことをつかんでいた。

「どうして私が太洋州人にこんなに拘っているんだろう、 って思っているでしょ」

「けっこう思っていたりする」

妙な言い回しで、気にしていないから、というニュアンスをハルジはサンドラに伝えたつもりだった。

人が拘っていることには、他人が触れてはならない、その人にとつてとても大切なものがしばしば含まれている。そこに判っていて自分から入り込むほど、ハルジは無神経ではなかった。

そのちょっとした気遣いもサンドラは感じ取ったようだった。

「いいよ、教えてあげる。私の秘密」

サンドラはなめらかに続けた。

「私ね、養女なんだ」

episode 2 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の10月30日です。

episode 3

「本当の両親は片方が東洋人^{エイジャン}みたい。でも私、今の太洋州人^{オセアニアン}の両親を愛しているから。だから太洋州人であることに誇りを持っているのよ」

「それを知ったのはいつ頃？」

サンドラは何でもないことのようにすらすると答える。

「スクールに入った年だったから、6歳の時。偶然、知ってしまった。両親……育てのね、には聞けなかった。隠したがっていたのが判っちゃったから」

出生にまつわる真実は、明かすタイミングが悪いと後々酷いトラウマになってしまうことがあるが、察するにサンドラの場合はさほど悪いタイミングではなかったらしい。ショックが全くなかった訳でもないだろうが。

「でも、本当の両親のことが知りたくて。25歳になれば自分で調べられるってことは知っていたけど待ち切れなかった。だから、ちゃんと勉強して分子遺伝学ラボに入ったの」

分子遺伝学ラボにはDNAトレーサーという装置がある。DNA鑑定に用いられる他、研究員になってIDさえ取得すれば、当局の膨大なDNAバンクにアクセスできる。

対象者の承諾さえあれば、そのDNAが何者から受け継がれたのか、つまり生物学上の親を調べることができる。もちろん自分のDNAなら自分が承諾すれば良いのだから、調べるのは容易い。

「飛び級してラボに入れば、うまくいけば18歳で調べられるじゃない？」

研究員になるためには最低3年間は研究生として学ばなければならぬ。

「それじゃ、サンドラは研究員になるんだ」

「うん、そのつもり。ハルは？」

「働くよ、奨学金返さなきゃならないから。そうだ、サンドラにも俺の秘密、教えておこうか」

後から考えると、何故、自分がそんなことを口にしたのかとハルジは首を傾げたくなる。たぶん、秘密をサンドラから一方的に聞かされるのではなく、分かち合いたかったのだろう。

無言の中に、話したくないなら無理をして話さなくてもいい、という雰囲気を感じられた。

ハルジは緊張の為に乾いてくる唇を湿らして、口を開いた。

「俺、孤児なんだ。15歳の時、両親が死んでしまったから」

「……知らなかった」

「あんまり人に言うことじゃない、こんなこと。自分から言ったのは初めてだと思う」

「実を言うと、私も初めてだったりして。育ての親も私がこのことに気づいているって知らないのよ」

少しの間、奇妙な沈黙が流れた。奇妙だが互いに居心地の悪さを感じるものではない。むしろ逆だ。

自分がそれを望んだのにもかかわらずハルジは、この時間を打ち切らなければならぬ、と強く思った。

こういう時間を幾度も過ごしたら二人は友人でなくなってしまう。

——そんな予感があった。

どういう形であれ、ハルジが友人としてのサンドラを失うのは耐え難いことだ。

「……ま、人には秘密の一つや二つはあるってこと」

自分たちが特別な人間ではない、ということを強調するように言い含める。

自分たちが特別ななどという妄想とも言える感覚は例えば、他人を前に言い放てる程に肥大してしまったら最期だとハルジは思う。そんな人間は社会の中で生きていく資格はない。

社会が、他人が、認めないだろう。排除されてしかるべき行為だ。しかし、それには甘い響きが伴う。同じ意識を持つ者を強く結び

つける。自分たち自身に酔えるのだ。

ハルジは、自分たちは周りと違うという感覚で人との繋がりを強めたくなかった。きっかけとしては許容するが、それだけで築いた繋がりは必ず崩壊する。

だからこそ、サンドラとの繋がりをそういうものに頼るのは絶対に避けたかった。

それに本当に特別な――大部分の人と違うものを持つ者は、そういうことは口にしない。

ハルジはそれを知っていた。

「パートナーのことは頑張りな」

咳払いをすると、ハルジは当てずっぽうではなく、ある程度の根拠からサンドラを励ます。

「頑張っていれば、そのうち、『いいこと』もあるよ、きっと」

「判った。ありがとう、ハル」

サンドラはいつもの元氣を取り戻していた。通話ユニットの向こうのちよっとはにかむような笑顔が目に見えるようだ。

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

決まり文句のようになっていた挨拶をかわして、フォンを切る。

その直後、サンドラの研究を担当する磯崎という名の研究員から、ハルジはフォンを受け取った。彼はハルジと同じ年で既に研究員だった。彼こそがサンドラの前に15歳でラボ入りした秀才である。

彼からは何度かサンドラのこととフォンをもらっていた。

磯崎はサンドラに気がついて心を砕いているようだった。

ハルジがサンドラを励ました根拠が彼である。ハルジ以外にも自分を気にかけてくれている人がいたと知ったら、サンドラはどんなに心強いだろう。

「彼女、君になら話していると思ったんだ」

彼のこの言葉は、ラボ内で他のメンバーからハルジとサンドラがどのように見られているかを端的に表わしていた。

互いにいちばん心を許せる仲。

だが、二人の態度がさっぱりとしていたので、その関係にそれ以上の感情があると疑う者は誰一人としていなかった。

ハルジはサンドラに相談されなければ、彼女が人間関係で悩んでいることは判らなかつただろうから、それなしにこのことに気づいた研究員という職業の人は、それだけ研究生に注意を払うものだと感心していた。

が、磯崎が注意を払っていたのは研究生ではなく、サンドラ・フイオルという一女性だったのだと気づいたのは少し経ってからだった。

午後も2時近くに約束した訳でもなく食堂で一緒になったサンドラの口から、ハルジは直接聞いた。

「私、磯崎さんとお付き合いまするかもしれない」

「磯崎さんって、磯崎研究員のこと？」

「そう。告白、だと思ふけど……された」

「返事は？」

「まだ。でも、なんか私も磯崎さんのこと、ずっと好きだったみたい」

「なら、いいんじゃない」

「……うん」

向かいに座るサンドラのかすかな笑みが急に遠くなる。

昼下がりの閑散とした食堂の白いテーブルがやけに光って見えた。ハルジの体の中に眩しい光が射してきて、心の何処かがゆっくりと麻痺していく。

ハルジがこの時感じていたのは、後から考えれば喪失感だった。友人に大切な人ができてその分、自分と接してくれる時間が減るだろうという想いだった。

その友人が、たまたま彼にとって初めての、そしてその時唯一の女友達だったから、激しい感情を味わう羽目になったのだ、と。

episode 3 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月13日です。

episode 4

サンドラからの2度目の音声限定フォンは、1か月前のことだ。

「私、今、提供者と被提供者^{ドナーレシビエント}の研究をしているの」

被提供者はMCの症状が酷く、通称、メディスンと呼ばれる葉無しでは生きていけない人々のことである。

問題はそのメディスンにあって、これがある特殊な遺伝子を持つ人々の血液からしか抽出できないのだ。

その特殊な遺伝子を持つ人々が提供者である。

しかし提供者の数があまりに少ないので、一度、提供者と判明した人は、某所——一説にはそこは医療施設が集中する衛星都市、コロニーにあると言われている——に収容され、一生血液を採取される生活を送る。

被提供者の中に、稀にだが賜物^{ギフト}と呼ばれる超感覚的知覚（E・S・P）を持つ人間が出現する。

月などの資源採掘の際に絶大な能力を発揮する金属探査者^{メタルダウザー}。

犯罪捜査に欠かせない思念追尾者^{メモリーシークエンサー}・情緒感応者^{エンパス}。

治安維持に活躍する予兆感知者^{サインファインダー}など。

彼らなしで社会生活を営むことが出来なくなりつつある衛星都市の現状もあり、汎衛星都市連盟当局ではこの問題に手を焼いていると言う。

どちらにも人権はあり、どちらか一方を優遇することはできないというのが建前だったが、どちらか一方を優遇すれば、提供者、被提供者、衛星都市市民の寄生関係ともいえるバランスが崩れて衛星都市は事実上、崩壊するだろう。

提供者と被提供者の問題は歴史は浅いが、東洋人^{エイジャン}と太平洋州人^{オセアニア}の問題よりずっと深刻だった。

提供者や被提供者が生み出された原因は、MCウイルスがもたらした遺伝子の歪み構造にあり、それが解析されつつあるという学術

的な話から、美味しい料理を出すパブを見つけたから二人で一緒に行ってみるといい（もう一人は、この頃にはすっかりハルジの恋人と呼べるようになっていたカレリアのことなのだが）ということまで一通り話すと、サンドラは言った。

「あたし、今日、磯崎さんにプロポーズされちゃった」

「受けた、よな」

言葉とは裏腹にそんな筈はないという確信がハルジにはあった。もし受けたのなら、こんな回りくどい言い方はしないだろう。

思った通りの返事をサンドラは口にした。

「まだ。心配事が一つあって、それを片づけてからにしようと思っ
て。……ハルはカレリアさんに自分のご両親のこと、話した？」

思わぬ所に話の矛先が向く。お陰でかえって変に意識することなくハルジは答えることができた。

「と言うかね、カレリアは知ってるんだ。彼女とは孤児の集まりで知り合ったから」

「そっ……か」

疑問というよりは確認の為にハルジは聞いた。

「サンドラ、磯崎氏に話してないの？……その、ご両親のこと」

気まづくなるのを恐れてハルジの歯切れが悪くなる。しかしサンドラは、そんなことを気にかけることは全くないようだ。

「実はね。話さなきゃってずっと思ってたんだけど、タイミングを逸したっていうの？ それでここまで来ちゃったよ」

「いつかは話さなきゃ」

強い調子でハルジは言った。サンドラと磯崎ほどの親密な間柄なら、そういうことは、はっきりしておくべきだという思いからだっ
た。

「そんなのハルに言われるまでもないってば。でもね、早くても来週かな。来週、IDもらえるから。そうしたらDNAトレーサーを使えるの。それから」

「絶対に話さない」と

しつこく念を押しすぎたせいだろうか。サンドラがハルジに反撃した。

「うん。それより、プロポーズされるっていいものよ。ハルも早くカレリアさんにプロポーズしてあげたら？」

ハルジは一瞬、言葉に詰まってしまった。

「……うすうすは考えているんだけど。俺たちにはまだ早いかな、もう少し収入が多くなってから本格的に考えるよ」

「手遅れにならないように」

「ご忠告、ありがたく承ります」

あれほど想っていた磯崎と結婚できないなどと口走るとは。

ハルジには判った。何か——自分の根本を崩す程の何か、サンドラの身に降りかかったのだ。

あれから一か月たった。サンドラがこんなフォンをかけてきた理由は、DNAトレーサーの結果にあるであろうことは容易に想像がつく。

だが、それをハルジから口にはしない。飽くまでも彼女の口から聞かなければ。

「……サンドラ。話せることだけでいいから話して欲しい。おこがましいけど力になりたいと思うんだ。話してもらえないと、それできない」

実際にはどうであれ、サンドラの心の中では、磯崎は役に立てないことになっている。ハルジがどうにかするしかないだろうし、また、彼はどうかしたいとも思っていた。

「うん、判ってるんだけど自分でもよく整理がついてなくて。でも、判ってるの。ただ、突然すぎるだけ」

サンドラの声は揺れている。

「落ち着いて。最初から話してみるといい」

「うん」

2 回程、解読不能な声を出しかけて、3 回目にサンドラはやっと

喋り始めた。

「あたし、もらったIDで自分のDNAを調べてみたの。やっぱり片親は東洋人。父親よ。名前は周東チカシ^{すとう}。母は太洋州人。周東レナ。この母が、育ての父の妹に当たる人だった」

覚えたての言語を話すように短文を重ねていくサンドラ。動揺していることの表われだ。

「サンドラは伯父さん夫婦に引き取られたんだね」

「そうみたい。それがね、両親のDNA情報が封鎖されていたの。

準一級機密」

「準一級……!」

機密の等級の高さに驚いたというのもあったが、その等級がハルジにとって耳慣れたものであって最悪の予感がしたから、という方が驚きの声を上げた主な理由だった。

「研究員IDで注釈を見ることができた。あるプロジェクトに参加しているため機密扱い、なんだって。プロジェクトについては、詳しくはハルにも言えないんだけど」

「エンジェル・フィールド計画のことだろ」

「え!?!」

今度はサンドラが驚かされる番だった。

「あたしだってかなり特別な手続きをしてから判ったのに……」

episode 4 (後書き)

全11回完結の予定。

次回更新予定は2週間後の11月27日です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0335x/>

エンジェル・フィールド

2011年11月13日03時12分発行